

災害と地域に生きた人々

仙台市博物館 学芸企画室 菅原 美咲

第13回

江戸時代の仙台藩は、地震・津波・噴火・風水害や疫病・凶作などさまざまな災害に見舞われました。災害に直面した人々はそれをどのように受け止め、どう乗り越えてきたのでしょうか。今回は、災害に向き合いながら地域に生きた人々の姿を紹介します。

災害と為政者

寛永十四年（一六三七）六月、東北地方を中心に続いた大雨により、仙台藩は、死者三百二十一人、家屋の流失三千二百六十七棟、田畑等は十四万三千石以上の収量減という甚大な被害を受け、その状況を幕府に報告しました。翌十五年、幕府は仙台藩に対して特別に災害貸付金を出しました。これは前例のないことでしたが、被害の甚大さと仙台藩に対する格別の配慮から実現したようです。これを元手に、藩内では家臣・町人・百姓に対し一年間の無利子貸し付けを実施しました。仙台藩は、被害状況の把握と報告、人々の喫緊の生活保護という為政者としての責務を果たしたことがうかがえます。

一方で、災害を鎮めるための祈禱も江戸時代の為政者が果たす役割の一つでし

た。元和九年（一六二三）四月に始まった蔵王山の噴火活動は翌年まで続き、農作物は、降灰のため大きな被害を受けていました。仙台藩初代藩主伊達政宗は、明国から訪日していた王翼（おうよく）という人物に祈禱を命じ、伊達宗高（むねたか）（政宗七男、村田城主）を名代として王翼とともに刈田岳（かいたけ）に登らせました。この例のように、藩は干ばつや長雨・疫病などさまざまな天災のたびにその終息を願い、寺社などに命じて祈禱を行わせていたのです。

災害と復興

仙台城の石垣は、江戸時代を通じて発生した地震や大雨によって度々崩落しました。本丸北側の石垣も、地震による崩落から、二度にわたって全面的に修復されました。その際、既存の石垣や盛土を再利用しながら構造を強化し、築造技術を改良させることで、崩落前よりも強固で、勾配も急な石垣を築いています。また大雨の際に溜池から水があふれる部分に排水設備を追加し、水害に備えることもしました。江戸時代の人々は復旧から復興へ、さまざまな技術を進化させながら災害を乗り越えていきました。

命をつなぐ

最後に安政三年（一八五六）七月二十三日の地震により、仙台藩の本吉郡周辺で津波が発生し、その被害の様子を記した記録を紹介します。記録によると、同郡に住む二十九歳の母親が、生後百日になる赤子とともにこの津波にのまれ、両足が泥に埋まって動けなくなりました。村の人が高波から母子を助けようとしたが、母親の体は泥から抜けません。母親は我が子に波がかからないよう両手で持ち上げていたため、子は無事救出されましたが、母親は立ったまま溺死しました。この記録からは、子を守る母の強い意志や、母子を助けようとした地域の人々の絆、命をつなぎ生きてきた人々の姿が見えてきます。

過去の人々がつなぎ、残してくれた地域と災害の記録は、今を生きる私たちにも災害に向き合うためのさまざまな考え方や力を与えてくれるのではないのでしょうか。



津波から子を守る母の様子を伝える記録
（「安政三年本吉郡海嘯調」部分・仙台市博物館蔵）

仙台市史 全32巻

原始から平成元年までの仙台の歴史をわかりやすく紹介！

「通史編」のほか、古代から現代までの歴史資料で構成される「資料編」、特定のテーマを詳しく掘り下げた「特別編」、「年表・索引」があります。

ピックアップ紹介



特別編7 城館

B5判/オールカラー/623ページ 6,285円(税込)
付録：奥州仙台城絵図など、仙台北城関連の絵図7点
中世に築かれた城を、地域ごとに写真や地図で解説。仙台北城については、過去の地震や火災による被害とその修復の過程を、最新の発掘調査をもとに詳しく紹介しています。



既刊紹介や購入方法は博物館ホームページでご案内しています。

仙台市博物館
SENDAI CITY MUSEUM

▶博物館ホームページ
▶博物館ツイッター

仙台市博物館 検索
@sendai_shihaku

▶お問い合わせ

〒980-0862 仙台市青葉区川内26番地(仙台北城三の丸跡)
TEL:022-225-3074 8:30-17:15 ※土・日・祝休日・年末年始(12/28~1/3)を除く

※当館は現在、大規模改修工事のため休館しています。令和6年4月に再開予定です。